

二〇二二年六月九日

金魚玉おきて老舗の美容院
声響くここが天下と牛蛙
雀らの野次馬めいて御田植祭
梅雨晴間なれば花壇の虫躍如
白妙の鰭振る金魚天女めく
梅雨の雲生駒嶺の襷低きまで

二〇二二年六月八日

竹林を縫ふ抜道や風薫る
親の丈超ゆるばかりに今年竹
庭の木々日ごとに伸びる入梅かな
本堂の軒に樋なし走り梅雨
敗将の一門の墓ほととぎす

二〇二二年六月七日

緑雨浴ぶ前垂れ赤き六地藏
女生徒の弾ける笑ひ更衣
十葉や陽ざしとどかぬ納屋の裏

二〇二二年六月六日

ここよりは一輛電車谿青葉
岩走る山の引き水柿若葉
駆け抜けてどの早苗にも富士の風
サボテンの四方八方花広げ
懸命さ習えと歩むかたつむり
風意地悪大噴水を乱しけり
万緑の底ひの水琴窟を聴く

よし女

せいじ

さつき

菜々

三刀

はく子

きづな

三刀

満天

有香

とううち

有香

とううち

よし子

菜々

うつき

とううち

あさこ

はく子

ともえ

宏

虎

二〇二二年六月五日

ねぢゆるむごと梔子の花開く
お湿りの波紋と見ればあめんぼう
夏帽に妻十歳は若返り
ざわめける山毛櫨の天辺走り梅雨

二〇二二年六月四日

古民家の茶房を抜けて夏の蝶
薫風裡一駅歩く御堂筋
万緑を眼下としたるカフェテラス
清貧を知れとどくだみ咲き満つる
裏山に餌す声は時鳥
あじさいの日裏日表色異に
人気なき午後の校庭夾竹桃
夏つばめ湧き立つごとく屋根越えて
上流を知っておるかに水すまし
大瀑布洗濯板の岩洗ふ
岩頭に水が水追ふ瀑布かな

二〇二二年六月三日

一輪車乗れたる吾子に山笑ふ
川風の通ふ蔵町青柳
竹皮を脱ぐや忽ち中空へ
薄雲を脱ぎさりてより月涼し
草茂る発掘を待つ休耕田
寄り合ひに享くる一献螢の夜

菜々

せいじ

宏

虎

雅

うつき

百合

満天

宏

虎

こすもす

あおい

ぼんこ

さつき

よし子

せいじ

せいじ

とううち

よし子

はく子

こすもす

せいじ

雅

流

毎日句会みのある選・二〇二二年六月二日